

## 山滴る

森岡 正作

### 秋風に

蛇の衣蔵の梯子を上りかけ  
群青の沼を抱きて山滴る  
すれ違ふ人を疑ふ木下闇  
蛇苺かはいいい嘘を聞いてやる  
ごきぶりに往復さるる電話中  
地べたごと灼くる鉄製農具かな  
隠棲のごと万緑の端に生く

登四郎先生には秋風を詠んだ句が実に多い。和歌には立秋の日に秋風を詠んだ名歌として、藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」があるが、この風の音をじいっと聴きいるのとは対照的に、先生にはじいっと風を見つめる（秋風に白湯注ぎ湯気のゆくへ見る）という句がある。何れにしても秋風というものは心身にしみじみと染み入るものであり、そこに「秋風」という季語の本情がある。学生時代には帰省すると鮎を獲ろうとよく川へ潜った。秋風が吹く頃は水も少々冷たく、近くで鮎や雑魚を追う子供らの声もない。心細さを振り切って水底の岩にへばり付くと、大きな鮎は鮎の届かぬ先を悠然と泳いで行く。そんな静けさのなかで心音だけが虚しく響く時、不意に東京へ帰らねばと思うのであった。これも何れも秋風の寂しさが為せることだったと思う。